

ひまわり (3)

ジーモン・ヴィーゼンタール
訳 柴 寄 雅 子*

Die Sonnenblume

Simon WIESENTHAL
Übersetzt von Masako SHIBASAKI*

キーワード

ヴィーゼンタール、ホロコースト、ゆるし

私にとって、ベッドに横たわるこの男が語った黒い目の子どもは、エーリだ。あの子の顔は私の記憶の中に消しがたく刻み込まれている。エーリは私が見た最後のユダヤ人の子どもだった。そのためか、私にはこうした不幸な子どもたちが皆、エーリのように見えてしまうのである。

さっきまでは、この瀕死の男にまだ哀れみの情を抱いていたが、今はそれも消え去った。彼に触れられると肉体的苦痛さえ感じるほどだ。私は自分の手を引っ込めた。

だが出て行こうとはもう考えていない。まだ何かがあるとはっきり感じたからだ。彼の話には続きがあるに違いない。

不明瞭に彼は何か囁いたが、私はまったく意に介さず、自分自身の思いに耽っていた。そもそも私がここにいるのは、この男が切に話したがっていることを聞くのが目的のはずだった。もっとも、私がしばし彼がここにいることを忘れたのと同様、彼のほうも私のことを忘れてるように見える。誰に聞かせるという風でもなく、彼は一本調子で話している。一人ぼっちで病床に臥す人は、よく独り言を言うものだ。本当に私に言いたいことを話しているのだろうか。それともあれは、私に伝えたいけれども、思い切って口に出せないようなことなのだろうか。彼が何を言い残しているのか知る由もない。どれほど想像を逞しくしても思いつかないし、誰も予見することはできない。しかし、この時代に私は一つのことを学んでいた。どれほど恐ろしいことでも、その上を行くさらに恐ろしいことが存在するものなのだ。

「僕にははっきり彼らが見えるんです……」。

彼は今なんと言った？ 彼らが見えるだと？ どうして見えるのだろう。頭は包帯でぐ

*しばさき まさこ：大阪国際大学人間科学部教授〈2002.10.24受理〉

るぐる巻きになっているのに。じっと彼の頭を見つめていると、まるで霧の中から二つの目が浮かび上がってきたような気がした。やはり見えているのか？

「あの子とその両親が見えるんです」と彼は続けた。

彼はうめき、息がぜいぜい言い出した。

「あの家族は舗道にぶつかった際に死んでしまったかもしれません。ひどいものでした。人々の悲鳴が一斉射撃に入り混じり、まるでその音をかき消そうとするかのようでした。もしかしたら、銃声の方も悲鳴をかき消そうとしていたのかもしれませんが。ぞっとしました。今もあの場面がつきまとっているんです。思いに耽る時間はありました——時間はふんだんにあったんです。でも、まだ足りないのかもしれない……」。

私にも銃声が聞こえているだろうか。私たちはすっかり慣れてしまい、発砲音を聞いてビクッとする者など一人もいない。たしかに銃声ならはっきり聞こえている。収容所では、はっきりなしに発砲があった。あちこちでパーンという音を耳にした。悲鳴も何度も聞いた。目を閉じれば、記憶の中から数多の出来事が浮かび上がってくる。

そのためか、彼の話は言葉数が少なく途切れがちだったにもかかわらず、私はまるでその場に実際に居合わせたかのように、ありありとすべてを思い描くことが出来た。建物の中に押し込まれた不幸なその家族の姿が見えた。悲鳴が聞こえた。絶望の表情が見えた。子どもを落ち着かせ慰めてから、衣服に火がついたまま舗道に飛び降りるところが見えた。

「その後すぐ僕らは交代になり、さらに行進して行きました。途中で聞かされたのですが、ユダヤ人の殺害は、ロシア人が密かに仕掛けていた時限爆弾に対する報復措置だったそうです。時限爆弾のせいで僕たちの部隊のおよそ30人が亡くなったので、その仕返しに300人のユダヤ人を殺したと言うのです。殺害されたユダヤ人とロシア人の時限爆弾との間にどんな関係があるのか、誰も問題にしませんでした。

夜には火酒をもらいました。火酒は忘れるのを助けてくれます。ラジオから前線のニュースが流れていました。撃沈した戦艦の数、捕虜や撃墜された戦闘機の数、新たな占領地域の拡張の話……薄暗くなって行って……」。

「薄暗い」とは、どういうことなのだろう。日没のことか。没落しかけている世界に、なぜなおも太陽が必要なのだろう。

「火酒を飲んだ勢いで、僕たちは一緒に歌い始めました。僕も加わりました。今では、なんであんなことができたのか、疑問に思います。自分を麻痺させたかったのかもしれませんが。一時的にはうまく行って、あのことは幻のように思えました。でも夜になると、何もかもが蘇ってくるんです……」。

僕の横で寝ていたのはペーターで、彼もシュトゥットガルトの出身でした。眠っている最中に落ち着かない様子で動き回り、何かブツブツ言っていました。僕は起き上がって彼をじっと見詰めました。けれど暗すぎて、表情は分かりません。ただ『いやだ、いやだ』とか『やりたくない』といった言葉が聞こえました。翌朝、仲間の何人かは、夜のあいだ一睡も出来なかったことが、その顔から読み取れました。でも誰もそのことについて話そうとせず、互いに顔を合わせるのを避けていました。それは隊長の目にも留まりました。

『感傷に浸っている奴ら！ おい、そんなことでは、この先やって行けないぞ。これは戦争なんだ。シャキッとしろ。あれは同胞ではなかったじゃないか。ユダヤ人など人間ではない！ ユダヤ人はあらゆる不幸の元凶なんだ。ユダヤ人を殺すのは、ドイツ人を殺すのとはわけが違う——たとえ男だろうが、女だろうが、子どもだろうが。奴らは我々とは別なんだ。ユダヤ人は消えるのが当然だ。あっさりいなくなるべきなんだ。我々が軟弱だったら、今頃、他の国の奴隷になっていただろう。しかし総統閣下が……』

最後の言葉からすると、結局のところ彼は単に自分自身のためだけに許しを求めているとも受け取れる。彼はそれに気付いたに違いない。最後まで言い終えずに、言葉を切った。

「お分かりでしょう」と彼は話し始めたが、その先は続けなかった。

いったい彼は何が言いたいのだろう。自分自身を安心させることだろうか。そもそもなぜ自分の生い立ちなどを私に話したのか、そのわけを説明したいのだろうか。しかし、そこに話が戻ることはなかった。

「僕たちの休憩は長くはありませんでした。正午ごろにはまた出発しました。僕らは今度は突撃部隊に組み込まれていたんです。車に乗って、戦闘地域にまでつれて行かれました。でも、そこでも敵の姿はあまり見かけませんでした。村も小さな町も空っぽで、敵は戦いもせず逃げ去っていたんです。ただ所々で退却を援護するためのちょっとした攻撃を受けて、ペーターは負傷し、カールハインツは亡くなりました。それからまた休憩時間があって、体を洗ったり手紙を書いたりできました。そのとき、仲間とは本当にいろいろなことについてしゃべりましたが、ドニエプロペトロフスクの事件については、ほとんど話しませんでした……。

僕はペーターを見舞いに行きました。彼は腹を撃たれていたんですが、意識はあって、僕だと分かれると、嘆願するようなまなざしで見つめました。僕が近づいて腰かけると、『もうじき別のところに移されるんだ』と話してくれました。それから『あの建物の中にいた人たちのことを覚えているだろう……』と言って、意識を失ってしまったんです。かわいそうなペーター。これまで体験した中で、一番恐ろしい事件のことを思いながら亡くなってしまったんです」。

廊下で足音が響いた。ドアの方を見ると、今にも開きそうだったので、私は立ち上がった。彼はそれに気付いたらしい。

「どうかここにいてください。看護婦さんが外で見張ってくれています。誰も入って来やしませんから。これ以上、お引止めするつもりはないんですが、まだ話さなくてはならない大事なことが残ってるんです……」。

私は不承不承、腰を下ろしたが、看護婦が入ってきたらすぐに消え去ろうと心に決めた。

この期に及んで彼はいったい何を言い残しているのだろう。自分だけがユダヤ人を殺したわけではない、自分は多くの人殺しのうちの一人に過ぎない、と言いたいのだろうか。

「その後、数週間かけてクリミアへ進出しました。そこではロシア人が砦に立てこもっていて、激戦が待ち受けていると言われました。これまでみたいな散歩気分ではなく、一

対一の接近戦になると……」。

彼の言葉はますます途切れるようになった。どうやら自分の体力を過信していたらしい。呼吸が不規則になり、喉は乾ききっている。彼の手は水の入ったコップを探している。

私は身じろぎもしなかった。私がかここにいることが彼に感じられれば、それで十分だ。

彼はコップを見つけ、ごくごくと水を飲んだ。

そしてため息をつき、囁いた。「ああ、神様」。

彼は「神」と言った。しかし、神はいない。ゲッターの女性が語ったように、「休暇中」なのだ。誰もが神を必要としていた。神の遍在を示す印を感じ取りたいと望んでいた。

この瀕死の男やその仲間たちにとって、そもそも神は存在しない。総統に取って代わられたからだ。奴らの極悪非道が罰を受けずに済んでいるため、神はでっち上げでしかない、それもユダヤ人がでっち上げたおぞましいものでしかない、という彼らの信念は強まるばかりだ。倦むことなく、彼らはその信念を「証明」しようとしている。それなのに、この男は神のことを気にかけているのだろうか。

私たちにとって、神は本当に不在だった。何も神を追放したり嘲弄したり、はたまた神に挑戦したわけでもない。神を信じる人も信じない人もまったく同様に、悪魔のような絶滅機構によって粉碎されてしまった。罪を犯す機会などまったくなかった子どもも、同じ目に遭った。なぜ神は子どもまでも見放したのだろうか。どうしてあの幼いエーリを助けてくれなかったのだろうか。あの子は飢えの余り、鳥の餌を盗んで食べるどころまで追い込まれていたのに。

「クリミアでの戦闘は何週間も続きました。多くの死傷者が出て、あちこちに戦没兵士の墓地が作られました。人の話では、手入れが行き届いていて、どの墓にも花が植えられているそうです。僕は花が好きです。叔父の家の庭には花がたくさん咲いていました。草の上に寝転がって、何時間も花を見つめたものです……」。

つまり、墓に入ればひまわりが手に入ることを、彼はもう知っているのだ。人殺しは死んでもなお何か財産がある。それにひきかえ私はどうだ。

「僕たちはタガンログへ近づきました。そこではロシア軍が陣地を構えていました。起伏の多い作戦地域で、100メートルも離れていない彼らと向かい合うことになりました。敵はひっきりなしに大砲を撃ってきます。僕らは塹壕でうずくまり、水筒に入れた火酒を飲みまわして、不安を追い払おうとしました。突撃の命令を待っていて、遂にそれが来たとき、塹壕を駆け上がって突進しました。けれども突然、僕はまるで根が生えたように立ちつくしてしまいました。何かが僕に降りかかり、装着した銃剣を持つ手が震え始めたんです。

そしてあの火に巻かれた家族がはっきり見えました。子どもを連れてお父さんと、その後ろにお母さんがいて、僕の方にやって来るんです。「またもやあの家族を撃つなんて、真っ平だ」という思いが頭を駆け抜けました……。そのとき僕の横で手榴弾が爆発して、僕は意識を失いました。

野戦病院で意識を取り戻すと、目が見えなくなっていました。顔はすっかりつぶれ、おまけに上半身の一部もやられていて、全身傷だらけでした。看護婦さんが話してくれたん

ですが、医者は僕の体からバケツ一杯分もの手榴弾の破片を取り出したそうです。僕は死んだも同然で、まだ生きているのは奇跡だそうです……」。

彼はため息をついた。またもや彼の考えは自分自身のこと集中し、自己憐憫に占められている。

「痛みがだんだん耐えがたくなって行きました。体中にたくさんの鎮痛剤の注射を打たれて……。次から次へと別の野戦病院へ運んでくれましたが、決して家には帰してくれませんでした。本当に辛かった。僕は家に、母のところに、帰りたかったんです。父には容赦なくきついことを言われるのは分かっていました。でも母なら、僕がこんなことになっても、違う目で見てくれるでしょう」。

彼が悪戦苦闘しているのが見て取れた。何事も美化しまいと骨折っているのだ。彼は再び私の手を握ろうとしたが、少し前に私はもう手を引っ込めて、脚の下に押し込み、彼の手が届かないようにしていた。殺人を犯したあの手には、もう二度と触れられたくはない。

彼は私の同情を求めていた。同情される権利が彼にあるのだろうか。そもそも彼のような男が同情に値するのか。もしかしたら自分で自分を哀れんで、同情を得られると思ったのかもしれない。「お分かりでしょう。あのユダヤ人たちはすぐに亡くなり、僕ほど苦しみはしませんでした——もちろん、彼らは僕みたいに罪を犯していませんが」と彼は言った。

私は立ち上がって出て行こうとした。彼が生涯で最後に出会うユダヤ人が私なのだ！けれども彼は貧血の白い手で、私をつかんで放さない。どこからあんな力が出てくるのだろう。血の気もないのに。

「次から次へと別の野戦病院へ運んでくれましたが、決して家には帰してくれませんでした。でもこのことはもうお話しましたね……。自分が今どんな状態か、僕には分かっています。ここに来て以来、ドニエプロペトロフスクの恐ろしい事件のことをいつも考えずにはいられません。もうお仕舞いになっていたらいいんですが、でもまだ死ぬわけにはいかない。何度もそう願いました……。お医者さんが注射を打って、楽にしてくれればいいのにと思ったこともあります。安らかに死なせてくださいと、お医者さんに頼んだこともあります。でも、僕には情けをかけてくれませんでした。そのお医者さんが、死にかけていたほかの人を、注射で苦しみから解放してやったことを僕は知っています。僕がまだ若いので、気が咎めたのかもしれませんが。ベッドの足元の表示板には僕の生年月日も書いてあるので、それを見てためらったのでしょう。それで僕はこうしてベッドに横たわり、死を待っているというわけです。体の痛みはとても辛い。でももっと苦しいのは、良心の呵責なんです。あの燃えている家と窓から飛び降りた家族のことが、僕に片時も安らぎを与えてくれません」。

彼はそこで黙り込み、言うべき言葉を探した。

いよいよ私に何か頼もうとするなと思った。聞き手が欲しいというだけの理由で私を呼んだとは、到底考えられなかった。

「子どものころ、僕は心の底から神と教会の掟を信じていました。あの頃は何もかも、もっと簡単でした。あんな風に信じられたなら、死ぬことはきっとそれほどむずかしくは

ないでしょう。

死ぬに死ねないんです……あのことに決着をつけない限り。これは僕の告解のつもりです。でも、何と言う告解だろう。返事のない手紙みたいだ……」。

私が無言のままにいることを、彼はほのめかしているのだろうか。しかし、いったい彼に何と言えというのだろうか。

ここにいるのは瀕死の男、なおかつ人殺しだ。とはいえ彼は自分から人殺しになりたかったわけではなく、容赦ないイデオロギーのせいで、人殺しにさせられてしまったのだ。彼は自らの悪事を一人の男に打ち明けた。だがその男は、もしかしたら明日にも同様の悪行によって死ななければならないかもしれないのだ。

彼の言葉には本当に改悛の情がこもっている。彼が直接そう言ったわけではない。そんなことは不要だ。彼の話し振り、そしてほかならぬ私に話したという事実が、如実にそれを物語っている。

「信じてください。もしドニエプロペトロフスクでの事件を起こらなかったことにできるなら、もっと長くもっとひどく苦しんでもいいと思っています。僕と年代のドイツの若者が、戦場では毎日大勢死んでいます。武装した敵と戦って、戦死しているんです。なのに僕は……僕はここで罪を抱えて横たわっている……。人生最後の時に、あなたが来てくださいました。あなたがどういう方かは存じません。ただユダヤ人ということしか知りません。でも、それで十分です」。

私は何も言わなかった。この若者は戦場で身を守るすべもない男や女子どもや老人と「戦って」いるのだ。火のついた人間が確実に死ぬと分かっているながら窓から飛び降りるところが、私には見える。私もその一人だったかもしれない。そして、そんな私を思い出したSS隊員が、手榴弾が飛んでくるのに身動きできず、塹壕に隠れそびれるということも起きたかもしれない。

彼は身を起こして、まるで祈るときのように手を合わせた。

「僕は心安らかに死んで行きたいんです。そのためには……」。

何かが引っかかって、口に出せないようだ。しかし私は、話を続けるよう彼を励ますためにここにいるわけではない。沈黙を続けた。

「あなたにお話したことが恐ろしいというのは、承知しています。死を待つ長い夜を何度も過ごす間、あのことをユダヤ人に話して……そして許しを請いたいと何度も思いました。ただ、まだユダヤ人が残っているのかも分からなくて……」

これがあなたにとって過大な要求だということは、分かっています。でも、答えていただかなければ、私は心安らかに死ねません」。

部屋の中が静かになった。不気味なほどの静けさだ。

私は窓の外を見やった。向かい側の外壁には太陽の光がさんと降り注いでいる。もう真昼ごろに違いない。陽がすでに高くなっている。中庭には小さな三角形の影しか、かかっていない。

外では陽光が輝き、この死の部屋では非人間的な時が影を落とす。何というコントラストだろう。

ここでは一人の男がベッドに横たわり、安らかに死にたがっている。しかし、彼にはそれがかなわない。おぞましい罪を犯したために、安らぎが見出せないからだ。その横には、死ななければならない別の男がいる。しかし、この男の方は死を望んではいない。なぜならそのようなおぞましい犯罪の終末を見届けたいからだ。

それまで面識のなかった二人の人間が、しばし運命を共有する。一人はもう一人の助けを期待している。しかし、期待された方も無力で、何もしてやれないのである。

私は立ち上がり、彼の方に目をやり、その合わされた両の手を見つめた。その間から、ひまわりの花が咲いているように思える。私は心を決め、一言も言わずに部屋を立ち去った。

ドアの外に看護婦の姿はもうなかった。私は自分がどこにいるのかを忘れていたので、看護婦が連れて来てくれた裏階段を使わなかった。学生時代の習慣で、正面出口に出る階段を下りてしまったのである。看護婦や医師たちのいぶかしげな目つきを見て、初めて私は自分の過ちに気付いた。だが、引き返しはしなかった。誰からも止められず正門から外に出て、仲間たちのところに帰り着いた。

真昼の太陽がぎらぎら照りつけていた。

収容所の仲間は芝生の上に座り、深皿からスプーンでスープを飲んでいて、それを見ると、私も腹がすいていることに気付いた。何かまだ食べるものをもらうのに、ぎりぎり間に合ったようだ。野戦病院が昼ごはんを私たちに恵んでくれていたのだ。

私は瀕死のS S隊員のことが忘れられなかった。彼との出会いが重くのしかかり、あの告白が心の奥底をかき乱していた。

「こんなに長い間、いったいどこへ行ってたんだ」とある男に訊かれた。彼の名前は知らないが、収容所からここまでずっと私の隣を歩いていた奴だった。

「てっきり逃げ出したものと思ってたぞ。そんなことをすれば、収容所では大変な目にあうがね」。

私は答えなかった。

詮索するように彼は質問を続けた。「何か手に入れたのか?」。そして、私の空のパン袋を覗き込んだ。他の囚人同様、私もパン袋をぶら下げていたからだ。

彼は胡散臭そうに私を見つめた。「絶対に何か手に入れたはずだ。ただ、俺に分け前をやるのがいやだから、何もない素振りをしているんだ」とでも言いたげだった。

そう勝手に信じておけばいいと思い、私は何も言わなかった。

「怒ったのか?」と彼はさらに訊いてきた。

「いいや」とだけ私は答えた。彼と話などしたくなかった。とにかく今は駄目だ。

短い休憩の後、再び仕事が始まった。私たちが空にしなければならない容器は無数にあるように思えた。トラックで汚物を運び出して、どこかの空き地で燃やしていたが、トラックは何度も行き来していた。

こんなにたくさんの容器を、いったいどこへ持って行っていたのだろう。だがそんなことは今やもうどうでもよかった。重要なのはただ、ここから立ち去ることだけだった。

ようやく仕事が終わったが、明日の朝もまたここに来て、一日中、汚物を処理するように言われた。それを聞いたとき、私はぞっとした。

収容所への帰り道、私たちを監視している「アスカリ」は、歌う元気をなくしていた。彼らは押し黙ったまま、私たちの横をのろのろと歩き、せきたてることすらしなかった。皆疲れきっていた。瀕死の人の部屋で半日過ごした私でさえ、疲れていた。本当に、あそこで何時間も過ごしたのだろうか。私の思いは、あの幻のような出会いに何度も戻って行った。

私たちが行進している脇の舗道では、またもや人々が立ち止まり、目を丸くしていた。私には彼らの顔の見分けがつかない。皆、何となく同じに見えてしまうのだ。おそらく、彼らは私たちのことなど、どうでもよいと思っているからだろう。

それ以外のどんな態度を彼らに取れと言うのだろうか。もう、私たちの姿に慣れっこになってしまっているのだ。この路傍の人たちにとって、私たちは何を意味しているのだろうか。多くの人は私たちを見ると、良心が疼き出すのである。

私は道行く人々を細かく観察した。歩くスピードがそれほど速くなかったのだ。というのも、前の荷馬車がガタゴト進んでいるので、ゆっくりしたテンポで歩かざるを得なかったからだ。

きっとあのうちの何人かは、大学の「ユダヤ人ゼロの日」を大いに楽しんだはずだ。そもそもこんな途方もない災厄を私たちにもたらしたのは、ナチスだけなのだろうか。人間がこれほど貶められているのを何の抵抗もせず黙って見ていた他の連中も、同罪ではないのか。彼らはそもそも私たちをまだ人間と思っているのだろうか。

二日前、収容所の新入りがとても悲しいと同時にとても気になる話をしてくれた。三人のユダヤ人が公開処刑されたというのだ。彼らがまだ縄に繋がれたまま、だらりと垂れ下がっている所に、飛び切り冗談好きな輩がやって来て、「ユダヤ教の掟にかなった清浄な肉」と書いた紙切れを一人一人に貼って行った。周囲にいた連中は、この抜群のジョークを見て、苦しくなるほど笑った。次々に通りかかる人はそこで立ち止まり、この滑稽な見物を楽しんでいた。ただ一人の女性だけが、こんな罰当たりなことをしてと不満をもらしたが、彼女はさんざん殴られてしまった。

ナチスはいつも公開処刑を大勢が見るように配慮した。こうした見せしめによって、あらゆる抵抗を萌芽のうちに抑えこめると考えていたのである。その上ナチスは、きわめて広範な住民階層がユダヤ人を敵視していることを知っていた。そうした住民にとって公開処刑は、古代ローマの競技のようなものだった。収容所内の話では、こんな残酷なことが好きな人間は少なくない。そうした連中は飽きることなく、凄惨な刑の詳細を派手に尾ひれを付けて喋りまくっている。まるでサーカスの話をしているかのようだ。今、歩道で立ち止まり、唾然として私たちを見ている人の中にも、この種の人間がいるのだろうか。というのも、笑い声が聞こえたからだ。彼らはユダヤ教の掟にかなった清浄な肉が行進していると思って、笑い出したのかもしれない。

グロデツカ通りが終わるところで私たちは左に曲がり、ヤノフスカ通りに進んだが、そこで止まらなくてはならなかった。満員の路面電車が何台も通り過ぎたからだ。鈴なりの

人がドアにへばりついている。彼らは疲れているようだが、家族の待つ我が家へいそいそと帰っている所だ。夜には一家団欒でトランプをしたり、政治を論じたり、ラジオを聞いたりするだろう。聞くのは禁止されている外国の放送かもしれない。この人たちには皆、一つの共通点があった。夢と希望を持っているのである。ところが私たちときたら、夜には点呼に召集され、報告隊長の気分しだいで体育の訓練をやらされる。彼がもうこの「楽しみ」に飽きるまで、例えば一、二時間も膝屈伸をしなければならないのである。あるいは「ビタミンB」が待ち受けている。両側にずらりと並んだSS隊員の間で、何時間も木の板を持ち上げ続けるのである。夜の労働はすべて「ビタミン」と呼ばれていた。もちろんこれは、本当のビタミンとは大違いで、何人もの命を奪った。

点呼のときに万一、一人でも欠けていたら、彼らはまず何時間もかけて数えなおし、それからその欠員一名のために、十人を列から引き出して、縛り首にするか撃ち殺した。見せしめのために……。

同じことがあすも繰り返され、あさっても繰り返され、私たちが死ぬまで続くのだ。

あした……。私は顔に包帯をした瀕死のSS隊員のことをまた考えずにはいられなかった。明日か明後日、彼にはひまわりが与えられるだろう。明日か明後日、私を待っているのは共同墓穴だ。私が仲間とともに寝起きしているバラックを整理しろ、あるいは全バラックを整理しろという命令が、いつ来てもおかしくはない。また、見せしめのために選出される十人の一人に私になるかもしれない。収容所では、田舎から新たに囚人がやって来るといふ噂が流れていた。私たちのバラックにはこれ以上、人を入れる余地はない。収容所の管理組織が新しい建物を都合することができなくなると、別の方法で場所を作るしかない。それはとても簡単なことだった。古い囚人をのきなみ抹殺して、新しく空を作るのである。

私たちは二ヶ月に一度、そうした処理を経験していた。それはユダヤ人の自然減少を後押しし、そのおかげでガリシアとレンベルクを「ユダヤ人ゼロ」にするという目標の達成が、ますます近づくというわけである。

ヤノフスカ通りの粗末な建物はどんよりした灰色で、戦争の爪あとを明らかに示していた。正面には無数の弾痕があり、多くの窓にはガラスの代わりにボール紙や板がはめられていた。ヤノフスカ通りはレンベルクへの最重要の進入路の一つである。そのため、ドイツ軍が市を占領しきるまで、街路では激しい戦闘が吹き荒れたのである。

町並みが途切れると、再び戦没兵士墓地の墓石の列が延々と続いていた。ひまわりは朝とは違っているように見えた。花が別の方向を向いているのだ。夕陽に赤く染まり、やさしく風に揺れていた。小声でおしゃべりしているように見える。ぼろぼろの服を着て、疲れた足取りで横を通り過ぎて行く人間を見て、身震いしているのだろうか。

ひまわりの色——オレンジに黄色、金色、褐色——が、私の目の前で踊った。種々の色が豊饒な褐色の土から芽吹いていた。溝の付いた墓の盛り土がはっきり見える。その後ろには、暗い背景としてごつごつした樹木が立ち並び、さらにその上には紺色の空が晴れ渡っていた。

収容所に近づくと、「アスカリ」が歌えと命令した。彼らは再び、私たちが歩調を揃え

整然と行進するよう、注意し始めた。収容所の所長がこの近くにおいて、帰ってくる囚人を監視している可能性があったからだ。所長は出発と帰還のとき、誰もが楽しげに歌っていることを重視した。そのような見せかけを保てるよう、「アスカリ」は手助けをするわけだ。私たち囚人は全身で満足感を表現することになっていた。そうした表現の一つが歌だったのである。

この芝居が所長のお気に召さないときには、ただではすまない。私たちは大変な目に遭った。そんなときは「アスカリ」も笑ってはられない。所詮、彼らもロシア人に過ぎないのだ。

幸いにも所長の姿はどこにも見えなかった。私たちは別の労働班に続いてすんなり収容所の中に入り、点呼広場で整列した。

別の列にアルトゥールがいるのを見つけたので、彼に向かってこっそり合図をした。私は野戦病院での体験を彼に話したくてうずうずしていた。ヨーゼクとも話をしなければならぬ。

全く違ったタイプのこの二人が、あのことについて何と言うか、私は興味津々だった。

ひまわりの話も彼らにしたかった。なぜこれまで誰もひまわりに気を止めなかったのだろうか。もう何週間も咲いていたはずなのに。みんな気が付かなかったのだろうか。それとも、ひまわりのことを少しでも気にかけているのは、私だけなのか。

幸運なことに、点呼は珍しく早くすんだ。アルトゥールの肩に触れると、彼は振り返った。

「やあ、どうだった？ 重労働かい？」。彼は愛想のよい微笑を見せた。

「それほど、ひどくはなかったよ。どこへ行ってたかわかるかい？」。

「いいや。知るもんか」。

「工科大学さ」。

「へえ。もちろん、君の役割は以前とは別だろうね」。

「そりゃそうだ」。

「なんか、元気ないんじゃないか？」。アルトゥールは私をじろじろ見た。

私は答えなかった。人の群れが台所へと押しかけていたので、すぐに私たちも食事の配給を待つ囚人の列に加わった。

食べ物を載せた皿を手にしたヨーゼクが、私たちの横を通り過ぎる際に、目配せをして行った。

やがて私たちも食事をもらい、バラックの扉の前の階段に座って、それをスプーンで平らげた。点呼広場では囚人がいくつものグループを作り、その日の体験を語り合っていた。ことによると、営外部隊で働いている間に何かをうまく手にいれ、それを互いに交換しているのかもしれない。

私はふと「ホース」の方を見やった。「ホース」とは柵で囲まれた細い道で、収容所の内側を巡っていた。その終点は収容所前の砂の窪地で、射殺は通常そこで行なわれた。

時には、「ホース」で二日か三日も射殺を待つ人がいた。対象となる囚人をSSはバラックから引っ張ってくるか、市内の隠れ家から捕まえて来た。できるだけ多くを一度に射殺

して「合理的」に仕事を片付けるため、十分な人数が集まって、SS隊員が窪地までわざわざ行っても「報われる」ようになるまで、しばしば数日かかった。

その夜は「ホース」に人影はなかった。そのわけを、アルトゥールが説明してくれた。

「今日は五人いたけれど、みんな長い間、待たなくてよかったのさ。すぐにカウツォールが連れて行ったから。俺たちのバラックの一人が五人のことを知っていて教えてくれたんだが、うまく誤魔化していた市内の隠れ家から狩り立てられたそうさ」。

アルトゥールはまるでごく当たり前のこと、日常的なことを報告しているかのように、淡々と話した。

少し間を置いてから、彼は続けた。「そのうち一人は子どもでね」。彼の声がほんの少し動揺を見せた。「見事な金髪の子で、全然ユダヤ人らしくなかった。親はアーリア人の家にあの子を預けるべきだったんだ。そうすりゃ絶対、目立たなかつただろうに……」。

私はエーリのことを考えずにはいられなかった。

「アルトゥール、話があるんだ。工科大学は今、野戦病院として利用されていて、そこで体験したことが忘れられなくてね。話をしたら大笑いされてしまうかもしれないけど、君の意見が聞きたいんだ。君なら判断できると思うから」。

「話せよ」。

「いや、今はだめだ。後になってからの方がいい。ヨーゼクにも聞いてほしいし」。本当に彼らに私の体験を話していいのだろうか。今日殺された「ホース」の五人のことを、考えざるを得なかった。

あのSS隊員は私とはもう関係ないではないか。死に行く人の部屋で過ごした数時間については全く話をせず、すべて自分の胸のうちに納めておく方がよいのかもしれない。アルトゥールは皮肉屋だから、きつこう言うだろう。

「こいつを見ろよ。ここじゃあ毎時間、数え切れないほどのユダヤ人が苦しめられ殺されてるのに、死にかけのSS隊員のことを忘れられないんだとさ」。おまけに彼はこう付け加えるだろう。「君はナチスに病気をうつされたんだ。ドイツの方が我々より偉いと信じ始めてるだろう。だから、その死にかけのSS隊員のことを頭から離れないんだ」。これは凶星かもしれない。

さらに彼は言い募り、ナチスが私たち自身や家族に対して行なった犯罪の数々を並べ立てるだろう。アルトゥールの手にかかって私はすっかり恥じ入ってしまうに違いない。

野戦病院での私の体験は、誰にも言わない方がいいのかもしれない。

だが、少なくとも戦没兵士墓地のひまわりの話は彼らにしなければならぬ。

私は点呼広場まで行って、何人かの知り合いと話をした。

突然、誰かが囁いた。

「六！」。

これはSS隊員が現れたことを知らせる暗号だった。私はアルトゥールの方へと急いで戻り、彼の横に座った。二人のSS隊員が音楽隊のいるバラックへと歩いていった。

「後でいったい何の話をしたいんだい？」とアルトゥールが探りを入れてきた。

「あれから考えを変えて、話をするのはやめにした。話しても分かってくれないだろう

し、それどころか僕は非難されたり、他にも……」。

「他にも何なんだよ？ はっきり言えよ」とアルトゥールは迫った。

私は黙り込んだ。

「まあ、好きにするがいいさ」。アルトゥールは立ち上がった。怒ったようだ。二時間後、私はやはり彼らに話をすることにした。私たちは換気の悪いバラックの寝台に腰かけていた。市内への行進とひまわりについて、私は話した。

「誰もひまわりを見たことがなかったのかい？」

「もちろん私は見たよ。ひまわりに何か特別なところがあるのか？」とヨーゼクは答えた。

ひまわりが私にどれほど強烈な印象を与えたかは、説明したくなかった。死んだらひまわりが飾られるドイツ人がうらやましいとか、自分もいつかひまわりが欲しいと子どもじみた願いを抱いたとかは、言わずにおいた。

アルトゥールが割り込んだ。「まあ、目の保養にはなるね。ドイツ人はほんとにロマンチックなのが大好きだから。でも地下で腐ってゆく者にとっては、何にもなりはしない。死人と同様、ひまわりも腐ってしまう。来年には跡形もなくなってるだろう。新しいのを植えれば別だけど。でも来年のことなど誰にも分からないさ」。

私は話を続けた。どのように看護婦に呼び止められ、かつての学部事務室へ連れて行かれたかを語った。また瀕死のSS隊員が横たわるベッドの横で何時間も過ごし、彼の告白を聞いたことも話した。父親とともに飛び降りた子どもはエーリと呼んでおいた。

「その男は、その子の名前を知っていたのかい？」と訊かれた。

「もちろん知るわけではない。ただ僕の中ではエーリなんだ。その子の話を聞いたら、レンベルクのゲッターにいたエーリという少年のことを思い出したものだから」。

私は語りに語った。自分の考えをちょっとまとめるために中断すると、皆に続けろとせきたてられた。予期に反して、なぜみんなは私を嘲笑しないのだろう。非難しないのだろう。私の話に惹きつけられたに違いなかった。最後のところで、死に行く男に罪の許しを請われて、私が何も言わずに部屋から立ち去ったと話したとき、ヨーゼクがかすかに微笑んだのに気付いた。それは同意の印だと確信したので、私は彼に向かってうなずいた。最初に沈黙を破ったのはアルトゥールだった。

「一人減ってくれるってわけだ」。

この短い言葉は、当時みんなが感じていたことをずばり表現していた。それにもかかわらず、私はアルトゥールの反応に満足しなかった。

普段はめったに口を利かないアーダムという男が、考えこませるような発言をした。

「つまり君は死にかけの人殺しを見たわけだ。それなら一日十回でも見たいもんだね。そんな見舞いなら、いくらでも行きたいよ」。

アーダムが冷笑的になるのも、私にはよく理解できた。彼は建築の勉強をしていたのだが、戦争が勃発したため大学を辞めなければならなかった。ポーランドがロシアに占領されていた間、彼は建築現場で働いていた。家の全財産はロシア人によって国有化されてしまった。1940年の夏、大々的なシベリア送りが始まり、おしなべて「悪しき社会的出自」

の人、中でも富裕階級の人がその対象となったとき、彼は家族とともに何週間も身を隠していた。

収容所に入れられてから初めて出会ったとき、彼は私にこう言った。

「ほらね、ロシア人から隠れていた甲斐があった。もし奴らに捕まっていたら、今頃はシベリアさ。でも僕はまだちゃんとここにいる。もっとも、その方がましなのかどうか…」。

通常、彼は周囲の出来事には全く無関心だった。奥さんはゲッターにいますが、その消息はあまり分からなかった。奥さんは何か軍関係の仕事をしているに違いない。

ポーランドがドイツに占領されてから何日もたたないうちに、彼の両親は亡くなった。彼と両親との絆はとても強かったようだ。浮世離れした振る舞いのため、彼は夢遊病者のような感じがすることもあった。彼はますます人との交わりを避け出したが、私たちにはその理由がよく分からなかった。結局のところ、私たちにしても彼より幸運だったわけではなく、身内の大半を失っていたからだ。

どうやら私の話がショックを与え、アパシーの状態から少し彼の目を覚ましたらしい。

長い間、誰も一言も発しなかった。

やがてアルトゥールが起き上がり、誰かがラジオのニュースについて話している寝台へと移って行った。他の者もまた自分の用事に戻っていった。

ヨーゼクだけが私の隣に残った。

「実はなあ」と彼は切り出した。「そのSS隊員との出会いについて、お前が話をしていたとき、私は最初、本当にそいつを許してしまったんじゃないかと気が気でなかった。許すとしたら、殺された人からその権限を与えられることが必要だからね。自分自身が受けた被害なら、思いのままに許し、忘れていい。自分が得心すれば、それで済むからだ。しかしいいかな、他人が受けた危害について、おまえが自分でどうこうしていたら、それは重大な罪になるところだった」。

「でも、僕らは運命共同体で、別の人の代理をしてもかまわないのでは？」と私は反論した。

「よく注意して聞きなさい」とヨーゼクは続けた。「どんな人の人生にも、まず二度と起こらないような瞬間がある。君は今日、そんな瞬間を経験したんだ。本当だよ。たとえ今、私たちがその全体を落ち着いて判断できないにしても、あれはそんな特別な瞬間だ。この問題は単に君だけのものじゃない。君が自分で納得しかねているのは、見れば分かる。だがね、安心したまえ。私だって君と同じことをしたから。ただ君とは違って、はっきり意識して、意図的に許しを拒んだろうがね。君の場合はもっと無意識的だった。だから、あれでよかったのかどうか、分からないんだ。しかし、私を信じなさい。あれで正しかったんだ。あの男に苦しめられたのは君じゃない。彼が他の人に仕出かしたことは、君には許せないんだよ」。

ヨーゼクの顔が明るく輝き始めた。

「私はハオラム・エメス、つまり死後の生、よりよい別世界での生があると信じている。死んだら私たちは皆そこで出会う。もし君があつ男を許していたら、どうなっていたと思

う？ ドニエプロベトロフスキの死者が君のところに来て、問いつめるんじゃないかな。『何の権利があって、私たちを殺したあいつを許したんですか』とね」。

私は少々相手を馬鹿にするように首を振って言った。「ヨーゼク。おそらく強い信仰を持っているからでしょうが、あなたはことを単純にしすぎですよ。その点については言い返したいことがたくさんあります。ただし、私は自分がしたことを、たとえ修正できるとしても、決してそうしたくはありません。ただ、一つだけ言っておきたいのは、そのSS隊員が深く心の底から後悔していて、自分が犯した罪を決して美化しようとはしなかったことです。それについて、あなたの意見を知りたいんです。彼は本当に苦しんでいて――」。

ヨーゼクがさえぎった。

「その苦しみは、彼の罰、彼が受けるべき罰のほんの一部分に過ぎない。『汝、殺すなかれ』と書いてあるのだから」。

「しかしですね」と私は先を続けた。「彼には罪の償いをする時間がもうないですよ」。

「『償い』とは、どういう意味かね？」

まさに痛いところを衝かれてしまった。答えようがなかったのである。私は彼の質問を無視して、別の手を講じた。

「彼にとって僕は、もう話すことができない別のユダヤ人の代理人であり象徴でした。そのうえ彼は自発的に改悔の情を示したんです。人殺しとして生まれたわけではないから、人殺しとして死にたくなかったのでしょう。ナチスのせいで、彼は身を守るすべのない人間を殺すようにさせられてしまったんです」。

「それじゃあ君は、やはり許すべきだったと考えているのかい？」。

ちょうどその時、アルトゥールがまた私たちの方へやって来た。ヨーゼクの最後の言葉だけを耳にして、彼は例の落ち着いた声で言った。

「支配人間が下等人間に超人的なことを要求したんだ。もし許していたら、君はきっと一生、自分を許せなかっただろうよ」。

「アルトゥール。僕は死に行く人の最後の願いを叶えてやらなかった。彼の最後の問いに答えなかったんだよ！」。

「しかし、叶えることができない願い、叶えてはいけない願いがあることは、君だって認めるだろう。あの男は自分の教会の司祭を呼ばなくちゃいけなかったんだ。司祭となら、すぐに折り合いが付いただろうからね」。アルトゥールの言葉には、ほとんど気付かれなほほどの微妙な皮肉の響きが混じっていた。

「なぜだい？」と私は尋ねた。「罪の償いについて、一般的な決まりはないんだろうか？ どの宗教も、独特の倫理、独特の答えを持っているんだろうか？」

「どうもそのようだね」。

もう言うことはなかった。今のような状況で、今のような恐ろしい時代に、そもそもこの問題について言うべきことは、すでに語りつくされていた。このテーマにこれ以上触れることはなかった。

気分を晴らすためにアルトゥールが、仕入れてきたニュースについて話した。しかし私は彼の言葉を上の空で聞いていた。

私の思いは依然として、あの死に行く人の部屋にあった。

アルトゥールは間違っていたかもしれない。支配人間が下等人間に超人的なことを要求するという彼の着想は、おそらく月並みな言葉に過ぎず、なるほどと思わせるが、本当の答えにはなっていない。実際、あのSS隊員は、私に対して傲慢な支配人間の素振りは全く見せなかった。私は自分の経験した通りに全部を表現することが、うまくできなかったようだ。あれは、死ぬと決まった下等人間が、死ぬと決まったSS隊員のベッド脇にいるという感じだったのに……。彼の言葉からは自分の所業に対する絶望がはっきり聞き取れたのに、そんな彼の思いやあの雰囲気伝えるのに、私は失敗したのだろう。

突然、私は懐疑に襲われた。そもそもあれは現実だったのだろうか。私は本当に今日、あの古い学部事務室にいたのだろうか。

何もかも不確かに思えた。私たちの最近の生活のように、不確かで非現実的だった。

あれが現実だったはずがない。きっと空腹と絶望が呼び起こした単なる夢に違いない。私にはあのすべてが非論理的に思えた。ちょうど私たちの生活のように。

収容所では人は追い立てられる。そのため意志をなくして追い立てられるがままになる術を身につける必要があった。この私たちの世界では、慣れ親しんだ普通の生活の法則に従うものは何もなかった。ここでは一切が固有の論理を持っていた。そもそもここでなお通用している法則は、何だろう。ものを考える時に頼りになる基準点として唯一残っているのは、死の法則だ。この法則だけが論理的で、確実に、変更の余地がなかった。この法則の前では、何もかもが色あせて見えた。そのため人はすべからく受身になった。私たちはいつも、この唯一の法則は避けたい、この法則は変えようがないと、自分に言い聞かせていた。そのため私たちは麻痺して行ったのである。私たちが陥っていたどうしようもないアパシーは、希望のない状況をあからさまに表現していた。